〈原著〉

中学生へのエイズ教育における両親の関与
—親へのエイズ意識調査の結果を報告して—

吉 宮 仁 美[1)], 尾 崎 米 厚[2)], 母 里 啓 子[1)]

Parent's participation in AIDS education for junior high school children
—After the parent's attitude on AIDS education was reported to themselves—

Hitomi YOSHIMIYA[1)]
(Asahi Public Health Center, Yokohama, Japan)

Yoneatsu OSAKI[2)]
(Department of Epidemiology, National Institute of Public Health, Tokyo,Japan)

Hiroko MORI[1)]
(Asahi Public Health Center, Yokohama, Japan)

H. YOSHIMIYA, Y. OSAKI, H. MORI, *Parent's participation in AIDS education for junior high school children —After the parent's attitude on AIDS education was reported to themselves—*, **47**(2), 119-127, 1998

Object: 1. To investigate the effect of education through a brochure about attitude on AIDS education by parents to junior high school children. 2. To investigate attitudes of parents toward AIDS education.
Focus Group: Parents of children who attend a public junior high school in Yokohama, Japan.
Time: February 26, 1996.
Method: Anonymous questionnaires addressed to both parents were distributed through their children. After the parents had completed the form, the children brought it back to the school to put it in a prescribed box.
Participants: 457 individuals (206 fathers, 251 mothers).Response rate was 38.1%.
Results:
1. The prevalence of parents who are concerned about "Talking about AIDS within one month" and who "realized that AIDS is not only someone else's problem" has increased. 2. 36% out of the response of fathers read the brochure of *the first investigation. Parents who read the brochure of *the first investigation were 63 families out of 206 families. (Response rate: 31%) 3. The more fathers read the brochure of *the first investigation, the more fathers thought they "Understand that AIDS is not only someone else's problem" 4. Parents tended to think their children should be educated at a younger age than the age reported by the respondents of *our first investigation.
* The first investigation: On November 16 1995, we investigated how much parents talk about AIDS with their children and what effect talking about AIDS has on parents and children before we distribute a brochure of this first investigation to their parents.

(Accepted publication, June 23, 1998)
key words AIDS education, Parents, Home education, Junior High School Children

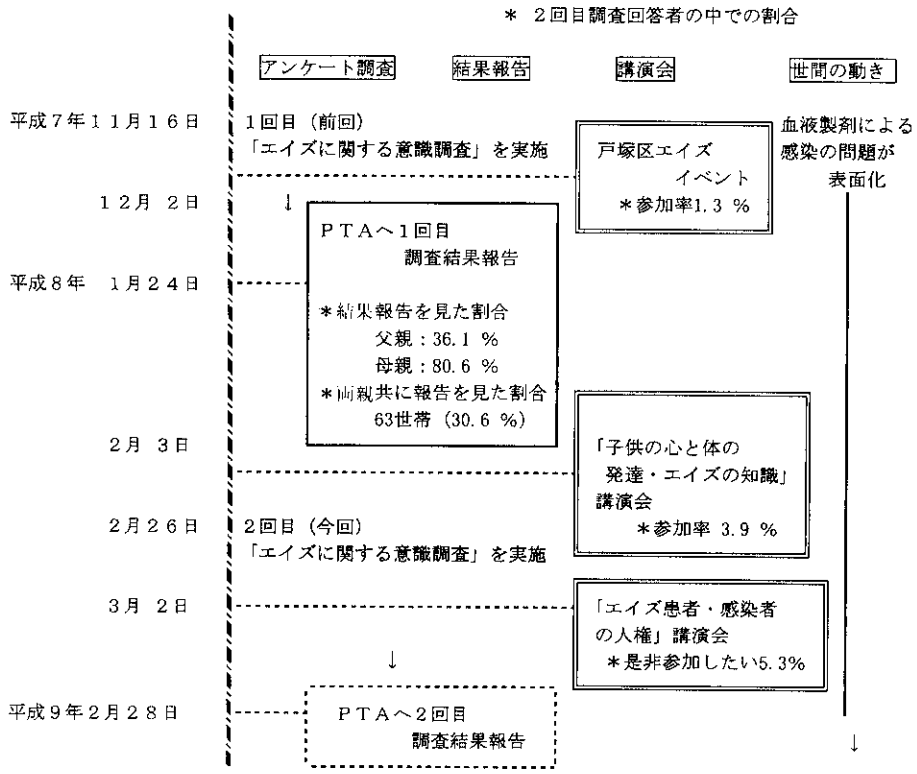
---

1）横浜市旭保健所，2）国立公衆衛生院疫学部
〔キーワード〕エイズ教育，両親，家庭教育，中学生
〔平成10年6月23日受理〕

Ⅰ．はじめに

血液凝固因子製剤による感染者を除く，日本の患者・感染者は平成９年４月30日現在，3,752人であると厚生省から発表されている．その中で特に10代，20代の患者・感染者は約43%，「異性間の性的接触」による感染が約47%を占めている．[1]この様に，エイズは性活動が活発となる若者に多い病気であるといえる．

最近の東京都の20代を対象にした「青年の関心領域と意識・行動に関する調査」では80%以上が「高齢化」「消費税」とともに「エイズ」について関心があると報告されている．[1]横浜市戸塚保健所では家庭で親が10代の子どもに性やエイズについて語れる様に，平成７年度より区内の小・中学校のPTA向けに啓発教育やオリジナル啓発パンフレットを作成するなど取り組んでいる．平成７年11月に１回目の親のエイズに関する意識調査を行った後，講演会をするとともに調査結果をプリントの形で親に報告したその後，再度親の意識調査を行った<図１>．１回目と今回の調査の回収率がかなり異なったので<図２>，結果の比較は困難だった．しかし今回の調査をとおし，今後家庭でのエイズ教育における両親の関与について考察したので報告する．



★１回目（前回）の調査結果プリントの内容

★エイズの正しい知識・年代別感染者
★エイズ教育の効果
★父母別の日常会話時間
★父母別子どもの男女別エイズ会話の経験
★父母別「十分な知識」の有無
★父母別エイズの正しい知識の点数
★父母別患者・感染者の増加見通し
★父母別「エイズは他人事感」の有無
★父母別子どものＨＩＶ感染の可能性
★父母別子どもと感染している友達のつきあい方
★エイズ会話経験と子どもの感染する可能性の有無
★エイズ会話希望と患者・感染者増加の見通しの度合い

図１　研究経過

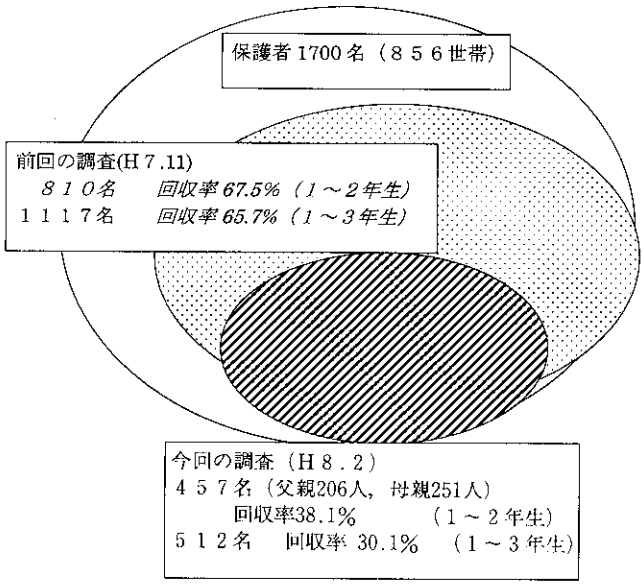


図２　調査対象者

II. 対象および研究方法

前回の調査は学校長が調査の参加を受け入れた横浜市内のある１つの中学校で父親，母親に対して調査を行った．学校で教師から生徒へ無記名の調査票が配布され，家庭で父親，母親それぞれが記入し，同一の封筒に入れた後，生徒が学校に持参し，教師に提出することにより回収された．調査時期は平成７年11月で，調査対象は１,700名（回収率は全体で65.7%）であった．調査項目は親のエイズに関する知識と態度，親子のエイズ会話などであった．

今回の調査も同じ中学校の父親，母親に対して教師から生徒へ調査票を配布され，家庭でそれぞ記入した．しかし，前回とは違い，生徒が学校に準備した回収箱に投函することにより回収された．調査時期は平成８年２月で調査対象は1,700名（回収率は全体で30.1%）であった．調査項目は前回の項目の他に「エイズ啓発講演会の参加の有無」を加えた内容であった＜表１＞．

今回は調査時期から３年生を持つ親の回答は非常に少ないため，１年生と２年生をもつ親1，200名中，前回は810名（回収率は全体で67.5%），今回は457名（回収率は全体で38.1%）の回答を有効として用いた＜図２＞．解析方法はパソコン用統計解析ソフト SPSS を用いて解析した．

III. 結　　果

１．調査対象者の属性＜表２＞

今回の調査の回答者としての親の性別は55%と母親が多く，年齢では父親，母親とも40代が75%から80%を占めていた．家族構成は「親と子ども」の核家族が81%で，前回の調査と同じ傾向であった．回答者の子どもの性別は「女の子」，学年では「１年生」を持つ親の解答が多かった．

両親共に回答した割合は前回は463世帯中358世帯(77%)で，今回は256世帯中206世帯（80%）と増加した．

２．親子の会話状況＜表３＞

「この１ヶ月期のエイズ会話の有無」と「今後のエイズ会話の希望の有無」について親と子供の性別に有意な関連はみられなかった．ただ，父親は「男の子」母親は「男の子」「女の子」の両方に会話の希望が多かった．

前回と比べて「この１ヶ月のエイズ会話の有無」は父親では３倍（前回 4.3%，今回 14.4%），母親では２倍（前回 15.0%，今回 32.3%）であった．「エイズ会話の希望の有無」は父親52.0%から48.8%，母親71.4%から67.8%へ前回よりも減少していた．

３．エイズに関する知識・態度＜表４＞

「十分な知識がある」と54.9%の父親が多く答えている割には，満点の割合が17.9%と低かった．一方，「十分な知識がない」と63.9%の母親が答えている割合には，父親よりも満点の割合が43.2%と正解数が高かった．

「感染者の増加みとおし」は父親，母親とも同じ傾向で，「非常に増加」「やや増加」をあわせると90%以上を占めていた．92.7%の両親は「エイズは他人事ではない」と答えていた．それは前回の調査の85.2%より「エイズは他人事ではない」と考える人の割合が増加していた．

表１　調査票

調査項目	調査内容
生活状況	親の性別・年齢・家族構成・子どもの性別・学年・兄弟の状況
参加の有無	12／２エイズデー，２／３エイズ啓発講演会，３／２エイズ啓発講演会の参加の有無・「エイズに関する意識調査」結果プリント見た有無
親子のエイズ会話の状況	この１ヶ月間のエイズ会話の有無・エイズ会話の内容・子どもが質問した時の親の対応・今後のエイズ会話の希望の有無
知識	知識の有無（主観的）・知識の正解数（客観的）
患者・感染者の増加見とおし	患者・感染者の将来の増加の有無
他人事感	エイズが他人事であるかの有無・親および子どもの感染の可能性の有無
患者・感染者への対応	子どもの友達・クラスの子・家族が感染した時の対応
エイズ教育	望ましい家庭と学校での教育時期

表2　調査対象者の属性

	256世帯の回答（うち，80%にあたる206世帯は父親・母親の両方から回答）			463世帯の回答（うち，77%にあたる358世帯は父親・母親の両方から回答）		
	今回			前回		
	父親	母親	計（%）	父親	母親	計（%）
親の性別	206(45.1)	251(54.9)	457(100.0)	367(45.3)	443(54.7)	810(100.0)
親の年齢別						
20歳代	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)			3(0.4)
30歳代	14(6.8)	61(24.4)	75(16.4)			143(17.8)
40歳代	168(81.6)	187(74.8)	355(77.9)			607(75.5)
50歳代	24(11.7)	2(0.8)	26(5.7)			47(5.8)
60歳代	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)			4(0.5)
家族構成						
親と子ども			205(81.0)			640(79.2)
親と子どもと祖父母(同居人を含む)			48(19.0)			167(20.7)
その他			0(0.0)			1(0.1)
子どもの性別						
男の子			118(46.6)			215(48.0)
女の子			135(53.4)			233(52.0)
子どもの学年						
1年生			134(53.0)			215(48.0)
2年生			119(47.0)			233(52.0)

表3　親子の会話の状況

今回(%)	父親			母親			前回(%)	
	男の子	女の子	計	男の子	女の子	計	父親計	母親計
エイズ会話のこの1ヶ月		$\chi^2=0.003$	p=0.96	$\chi^2=2.18$	p=0.14			
はい	13(14.3)	16(14.5)	29(14.4)	32(27.6)	48(36.4)	80(32.3)	15(4.3)	61(15.0)
いいえ	78(85.7)	94(85.5)	172(85.6)	84(72.4)	84(63.6)	168(67.7)	330(95.7)	346(85.0)
性・エイズ会話の今後の希望		$\chi^2=0.8$	p=0.09	$\chi^2=0.37$	p=0.83			
はい	51(55.4)	47(43.1)	98(48.8)	76(67.9)	88(67.7)	164(67.8)	178(52.0)	295(71.4)
いいえ	6(6.5)	16(14.7)	22(10.9)	4(3.6)	3(2.3)	7(2.9)	52(15.2)	23(5.6)
分からない	35(38.0)	46(42.2)	81(40.3)	32(28.6)	39(30.0)	71(29.3)	112(32.7)	95(23.0)

「子どもが感染する可能性」の「思う」は9.8%と前回の11.7%より減少していた．

「感染している子どもの友達への対応」と「感染している家族への対応」の「今までと同じにつきあう」と答えた人は前回調査の44.8%と82.6%より増加して，52.6%と89.6%であった．

4．性・エイズ教育に関する親の意識と会話の様子＜表5＞

「家庭での教育」と「学校での教育」は両親とも「小学校から」が49.5%，60.4%と多く，前回より「中学校から」が減少し「幼児から」「小学校から」の教育が希望として増加した．

性についての会話をした親の中で「子どもとの性の質問に対する親の対応」として「はっきり答えた」と「不十分ながら正直に答えた」を合わせると父親は88.3%，母親は98.4%であった．前回の調査の85.6%より前向きに答えた親は増加した．

「会話の内容」は父親が「病気の恐ろしさ」が，母親は「感染者・患者について」の話が一番多かった．しかし全体でみると，前回は「病気の恐ろしさ」が36.9%と一番多かったのが，今回は「患者・感染者のこと」が36.5%と一番になった．

「会話の相手」として父親は「会社の人」「妻」，母親は「夫」「友人」が多かった．

5．この1ヶ月間のエイズ会話の有無と各関連要因＜表6＞

「この1ヶ月エイズ会話」をした父親，母親ほど，エイズ会話の希望があり，エイズは他人事ではないと考えていた．「この1ヶ月間の会話」をしなかった父親ほど，性の会話はしておらず，結果プリントは見ていなかった．「この1ヶ月間のエイズ会話」をしなかった母親ほど，性の会話

表4　エイズに関する知識・態度

今回	父親	母親	計(%)	前回 計(%)
十分な知識（主観的）				
はい	73 (54.9)	56 (36.1)	129 (44.8)	234 (42.6)
いいえ	60 (45.1)	99 (63.9)	159 (55.2)	315 (57.4)
知識の正解数（客観的）				
0－4点	10 (5.8)	13 (4.8)	23 (5.2)	49 (6.7)
5－6点	132 (76.3)	142 (52.0)	274 (61.4)	388 (52.9)
7点（満点）	31 (17.9)	118 (43.2)	149 (33.4)	296 (40.4)
患者・感染者の増加見通し				
非常に増加	68 (33.0)	73 (29.3)	141 (31.0)	278 (34.5)
やや増加	124 (60.2)	155 (62.2)	279 (61.3)	459 (57.0)
増加しない	14 (6.8)	21 (8.4)	35 (7.7)	68 (8.4)
他人事感				
他人事である	15 (8.6)	12 (6.1)	27 (7.3)	99 (14.8)
他人事でない	159 (91.4)	184 (93.9)	343 (92.7)	569 (85.2)
子どもが感染する可能性				
思う	13 (11.5)	10 (8.3)	23 (9.8)	43 (11.7)
少し思う	71 (62.8)	84 (69.4)	155 (66.2)	217 (58.8)
全く思わない	29 (25.7)	27 (22.3)	56 (23.9)	109 (29.5)
親自身が感染する可能性				
思う	7 (5.3)	5 (3.4)	12 (4.3)	21 (4.4)
少し思う	52 (39.1)	51 (35.2)	103 (37.1)	118 (24.6)
全く思わない	74 (55.6)	89 (61.4)	163 (58.6)	341 (71.0)
感染している子どもの友達への対応				
今までと同じ	101 (56.1)	110 (49.8)	211 (52.6)	307 (44.8)
気をつけてつきあう	75 (41.7)	110 (49.8)	185 (46.1)	358 (52.3)
つきあわない	4 (2.2)	1 (0.5)	5 (1.2)	20 (2.9)
感染している家族への対応				
今までと同じ	168 (91.8)	186 (87.7)	354 (89.6)	545 (82.6)
同居，接触させる	4 (2.2)	14 (6.6)	18 (4.6)	59 (8.9)
別居	0 (0.0)	1 (0.5)	1 (0.3)	3 (0.5)
ありえない	11 (6.0)	11 (5.2)	22 (5.6)	53 (8.0)

はしておらず，十分な知識はないと考えていた．「この1ヶ月間に会話」をした母親ほど父親と比べて知識の正解率が高かった．

6．「エイズ意識調査の結果」のプリントを見た有無と各関連要因＜図1＞＜表7＞

調査結果のプリントを見た割合は父親は36%，母親は81%で，そのうち同世帯で両親ともプリントを見たのは206世帯中の63世帯（31%）であった．

「エイズ意識調査の結果プリント」を見た父親ほど，「エイズは他人事ではない」と考えていた．「エイズの意識調査の結果プリント」を見た母親ほど知識の正解数は高かった．

IV．考　　察

1．調査の回収について

前回と今回の回収率にかなりの差があること，回答者が同一であるという確認がないため親の意識や行動の変化は比較できず残念であった．前回より回収率が低い理由は，調査票の回収方法の違いと親の調査に対する意識の変化によるものではないかと思われる．前回は生徒が調査票を直接担任教師に手渡したが，今回は生徒が学校の回収箱に投函した方法をとったので，回収率が低かったのではないかと考えられる．

親の意識の変化として，「同じ調査にまた答えるのかと思ったので面倒」「もう1度調査をする意味が分かりにくい」などがあったのではないかと考えられる．

2．調査対象の属性について

前回と今回の回答者は同じ傾向をもつグループである．つまり，「父親，母親とも40代が75～80%」「家族構成として80%は核家族」「女の子をもつ回答者が半数以上」であるなど前回と今回とは変化がなかった．しかし子どもの学年を見ると，今回は1年生の親の方が回答が多いが，何故多いのか理由は分からない．

回答者の属性はほぼ変化がないと考えられるが，今回の方が調査票の回収方法が前回より回収しづらいにもかかわらず，同じ調査票に対し3ヶ月後に積極的に回答してくれたこと．回収率は68%から38%に減少したにもかか

表5 性・エイズ教育についての親の意識と会話の様子

今回	父親	母親	計(%)	前回 計(%)
家庭での教育はいつから？				
幼児から	21 (10.2)	40 (16.0)	61 (13.4)	75 (11.2)
小学校から	92 (44.9)	133 (53.2)	225 (49.5)	279 (41.8)
中学校から	60 (29.3)	59 (23.6)	119 (26.2)	227 (34.0)
高校から	13 (6.3)	7 (2.8)	20 (4.4)	45 (6.7)
成人してから	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (0.4)
分からない	19 (9.3)	11 (4.4)	30 (6.6)	39 (5.8)
学校での教育はいつから？				
幼稚園・保育園から	15 (7.3)	27 (10.8)	42 (9.2)	69 (8.6)
小学校から	106 (51.7)	169 (67.6)	275 (60.4)	416 (52.1)
中学校から	66 (32.2)	44 (17.6)	110 (24.2)	252 (31.6)
高校から	9 (4.4)	5 (2.0)	14 (3.1)	32 (4.0)
行う必要ない	0 (0.0)	1 (0.4)	1 (0.2)	4 (0.5)
分からない	9 (4.4)	4 (1.6)	13 (2.9)	25 (3.1)
最近の子どもとの性の質問に対する親の対応				
はっきり答えた	14 (27.5)	34 (27.2)	48 (27.3)	100 (24.8)
不十分だが正直答えた	31 (60.8)	89 (71.2)	120 (68.2)	245 (60.8)
ごまかした	2 (3.9)	1 (0.8)	3 (1.7)	24 (6.0)
答えなかった	4 (7.8)	1 (0.8)	5 (2.8)	34 (8.4)
エイズの話の内容				
感染経路	13 (22.8)	39 (23.6)	52 (23.4)	193 (26.4)
予防のし方	7 (12.3)	21 (12.7)	28 (12.6)	80 (10.9)
感染者・患者	17 (29.8)	64 (38.8)	81 (36.5)	188 (25.7)
病気の恐ろしさ	20 (35.1)	41 (24.8)	61 (27.5)	270 (36.9)
エイズの話をした相手				
夫あるいは妻	87 (31.2)	134 (35.4)	221 (33.6)	383 (35.3)
他の親	2 (0.7)	36 (9.5)	38 (5.8)	75 (6.9)
友人	37 (13.3)	94 (24.8)	131 (19.9)	389 (35.9)
近所の人	5 (1.8)	33 (8.7)	38 (5.8)	80 (7.4)
会社の人	99 (35.5)	27 (7.1)	126 (19.1)	項目作成しなかった
ない	49 (17.6)	55 (14.5)	104 (15.8)	157 (14.5)

わらず，世帯内訳を見ると両親ともに回答したのは77%から今回は80%と増加したことをと考えるとエイズについて関心の高いグループと考えられる

3．親子のエイズ会話状況について

前回と比べて「この1ヶ月のエイズ会話」は父親，母親とも増加していたのは，マスコミで薬害エイズについての問題が表面化し世間の関心が高まったこと，もともと回答者はエイズについてより関心が高いグループであること，前回の調査報告を見た割合から(父親36.1%：母親80.6%)会話が増加したのではないかと考える．

親の性別でみると，回答した父親は回答しなかった父親よりエイズについて関心が高い父親たちであると予想される．しかし回答した父親はエイズに関してより関心が高いグループにもかかわらず，「1ヶ月のエイズ会話」と「エイズ会話の希望」は母親より低い割合であった．実際の差はもっと大きいと予想される．

回答者としての父親の80%は40代と働きざかりなので，学校からのプリントを見たり，家族と会話する時間が少なかったのかもしれない．また，父親の意識の中に家のこと，子供のことは母親に任せるといった意識が強くあったのかもしれない．

4．知識や態度，意識について前回との比較

「エイズは他人事ではない」「感染している子どもの友達や家族へは今までどおりつきあう」「家庭と学校の性とエイズ教育は幼児期や小学校から必要」，会話の内容は「患者・感染者の話」「予防の仕方」は前回の時より割合が増加していた．もともと，今回の回答の親達は関心の高いグループであり，その結果は当然かと考えられる．「患者・感染者の話」は折しも薬害エイズが表面化され社会問題となってきた時期なので，この様な会話の内容が他の家庭でも話題になったのではないかと考えられる．

「エイズ知識の正解数が満点」「患者・感染者数が非常に増加する」と思った人の割合は前回より減少していた．もともと，今回の回答者は関心の高いグループであると考えられることから，母集団の値ははもっと低いと予想される．これはわが国におけるエイズへの関心がだんだん低下してきていることによるのかも知れない．

以上の結果は回答者の偏りか教育介入の効果か分からな

表6　「この1ヶ月間のエイズ会話」の有無と各関連要因

この1ヶ月間のエイズ会話の有無	父親 はい	父親 いいえ(%)	母親 はい	母親 いいえ(%)
調査の結果プリントを見た有無	$\chi^2=7.92$	$p<0.01$	$\chi^2=2.57$	$p=0.11$
見た	17 (23.9)	54 (76.1)	69 (36.0)	128 (65.0)
見ない	12 (9.3)	117 (90.7)	11 (22.9)	37 (77.1)
性の会話	$\chi^2=15.14$	$p<0.01$	$\chi^2=35.65$	$p<0.001$
はっきり答えた	5 (17.9)	9 (5.3)	21 (26.9)	13 (7.9)
不十分ながら答えた	9 (32.1)	22 (12.9)	39 (50.0)	50 (30.3)
ごまかした	0 (0.0)	2 (1.2)	0 (0.0)	1 (0.6)
答えない	1 (3.6)	3 (1.8)	0 (0.0)	1 (0.6)
話していない	13 (46.4)	134 (78.8)	18 (23.1)	100 (60.6)
エイズ会話の希望	$\chi^2=10.11$	$p<0.05$	$\chi^2=11.45$	$p<0.001$
あり	22 (75.9)	75 (44.1)	64 (83.1)	100 (61.3)
なし	1 (3.4)	21 (12.4)	1 (1.3)	5 (3.1)
分からない	6 (20.7)	74 (43.5)	12 (15.6)	58 (35.6)
十分な知識（主観的）	$\chi^2=1.96$	$p=0.37$	$\chi^2=6.57$	$p<0.05$
あり	14 (48.3)	59 (34.7)	26 (32.9)	30 (18.3)
なし	7 (24.1)	52 (30.6)	29 (36.7)	69 (42.1)
分からない	8 (27.6)	59 (34.7)	24 (30.4)	65 (39.6)
知識の正解数（客観的）	$\chi^2_M=0.12$	$p=0.72$	$\chi^2_M=4.84$	$p<0.05$
0－4点	0 (0.0)	8 (4.7)	3 (3.8)	8 (4.9)
5－6点	20 (69.0)	99 (57.6)	38 (47.5)	90 (55.2)
7点（満点）	9 (31.0)	65 (37.8)	39 (48.8)	65 (39.9)
患者・感染者の増加見通し	$\chi^2=1.73$	$p=0.63$	$\chi^2=5.71$	$p=0.06$
非常に増加	12 (41.4)	53 (30.8)	26 (32.5)	45 (27.1)
やや増加	16 (55.2)	106 (61.6)	52 (65.0)	102 (61.4)
増加しない	1 (3.4)	11 (6.4)	2 (2.5)	19 (11.4)
分からない	0 (0.0)	2 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
他人事感	$\chi^2=7.6$	$p<0.05$	$\chi^2=6.26$	$p<0.05$
はい	0 (0.0)	15 (8.7)	2 (2.5)	10 (6.0)
いいえ	28 (96.6)	126 (73.3)	67 (83.8)	115 (68.9)
分からない	1 (3.4)	31 (18.0)	11 (13.8)	42 (25.1)
子どもが感染する可能性	$\chi^2=3.47$	$p=0.32$	$\chi^2=3.11$	$p=0.38$
思う	2 (6.9)	10 (5.8)	5 (6.3)	4 (2.4)
少し思う	14 (48.3)	54 (31.4)	29 (36.3)	55 (32.7)
思わない	3 (10.3)	26 (15.1)	9 (11.3)	18 (10.7)
分からない	10 (34.5)	82 (47.7)	37 (46.3)	91 (54.2)
感染している子どもの友達への対応	$\chi^2=3.54$	$p=0.32$	$\chi^2=5.02$	$p=0.17$
今までと同じ	13 (44.8)	85 (50.0)	42 (53.8)	66 (39.5)
気をつけて付き合う	14 (48.3)	60 (35.3)	28 (35.9)	82 (49.1)
自分の子に注意	1 (3.4)	3 (1.8)	0 (0.0)	1 (0.6)
分からない	1 (3.4)	22 (12.9)	8 (10.3)	18 (10.8)

χ^2：χ^2統計量
χ^2_M：一方の変数に順序がある場合のマンテル検定の統計量

い．

5．前回の調査報告プリントによる介入効果

父親は結果プリントを見た人ほど「エイズは他人事ではない」とエイズについて関心があると分かった．

母親は結果プリントを見たから「知識の正解数」が高いのか，プリントを見た母親はもともとエイズについて関心が高い傾向であるから正解数が高いのか分からない．

しかし「調査報告プリント」を見た母親は日頃，学校からのプリントや本，雑誌，テレビなどから情報をキャッチするアンテナが備わっているのではないかと考えられる．それが知識の正解数の高さにつながったと考えられる．

一方「十分な知識がない」と思う母親に「この1ヶ月間の会話」が少ない．父親と比べて母親は「十分な知識がない」と思う割にはエイズの知識の正解率が高かった[2]．母親に対してさらに正しい知識の普及とともに自信を持つように励ますことが大切と考える．しかし実際に子どもと「いつ，何を，どのようにして会話するのか」分からないのが

表7 「エイズの意識調査の結果」のプリントを見た有無と各関連要因

プリントを見た有無	父親		母親	
	はい	いいえ(%)	はい	いいえ(%)
性の会話	χ^2= 1.56	p=0.82	χ^2= 5.14	p=0.27
はっきり答えた	6 (8.8)	7 (5.4)	28 (14.4)	6 (12.5)
不十分ながら答えた	12 (17.4)	19 (14.6)	73 (37.4)	15 (31.3)
ごまかした	1 (1.4)	1 (0.8)	0 (0.0)	1 (2.1)
答えない	1 (1.4)	3 (2.3)	1 (0.5)	0 (0.0)
話していない	49 (71.0)	100 (76.9)	93 (47.7)	26 (54.1)
エイズ会話の希望	χ^2= 5.17	p=0.08	χ^2= 1.44	p=0.49
あり	42 (59.1)	55 (47.8)	134 (69.4)	29 (61.7)
なし	7 (9.9)	1 (0.9)	6 (3.1)	1 (2.1)
分からない	22 (31.0)	59 (51.3)	53 (27.5)	17 (36.2)
十分な知識（主観的）	χ^2= 3.36	p=0.19	χ^2= 0.88	p=0.64
あり	29 (41.4)	43 (33.1)	43 (22.2)	13 (27.1)
なし	15 (21.4)	45 (34.6)	82 (42.3)	17 (35.4)
分からない	26 (37.2)	42 (32.3)	69 (35.5)	18 (37.5)
知識の正解数（客観的）	χ^2_M= 1.87	p=0.17	χ^2_M= 10.68	p<0.001
0－4点	4 (5.5)	5 (3.8)	9 (4.6)	2 (4.2)
5－6点	37 (50.7)	83 (63.8)	90 (46.2)	36 (75.0)
7点（満点）	32 (43.8)	42 (32.4)	96 (49.2)	10 (20.8)
患者・感染者の増加見通し	χ^2= 4.45	p=0.22	χ^2= 1.01	p=0.61
非常に増加	30 (27.5)	37 (43.0)	56 (28.3)	17 (35.4)
やや増加	41 (37.6)	38 (44.2)	126 (63.6)	27 (56.3)
増加しない	38 (34.9)	9 (10.5)	16 (8.1)	4 (8.3)
分からない	0 (0.0)	2 (2.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
他人事感	χ^2= 7.2	p<0.05	χ^2= 0.78	p=0.68
はい	5 (6.8)	10 (7.6)	9 (4.5)	3 (6.3)
いいえ	64 (86.4)	94 (71.8)	149 (74.9)	33 (68.7)
分からない	5 (6.8)	27 (20.6)	41 (20.6)	12 (25.0)
子どもが感染する可能性	χ^2= 2.53	p=0.47	χ^2= 0.71	p=0.87
思う	5 (6.8)	8 (6.1)	9 (4.5)	1 (2.1)
少し思う	29 (39.1)	42 (32.1)	67 (33.5)	16 (33.3)
思わない	7 (9.5)	22 (16.8)	21 (10.5)	6 (12.5)
分からない	33 (44.6)	59 (45.0)	103 (51.5)	25 (52.1)
感染している子どもの友達への対応	χ^2= 2.81	p=0.42	χ^2= 6.23	p=0.10
今までと同じ	36 (48.7)	64 (49.6)	90 (45.7)	19 (39.6)
気をつけて付き合う	30 (40.5)	45 (34.9)	88 (44.7)	20 (41.7)
自分の子に注意	0 (0.0)	4 (3.1)	0 (0.0)	1 (2.0)
分からない	8 (10.8)	16 (12.4)	19 (9.6)	8 (16.7)

χ^2：χ^2統計量
χ^2_M：一方の変数に順序がある場合のマンテル検定の統計量

実態ではないかと考える．それらを専門家として助言する必要があるし，子どもと会話するために親を教育する具体的なプログラムの開発が待たれる．

6．母親の家庭におけ性・エイズの教育者としての役割

父親より母親の方が子どもの性の質問に対して「はっきり答える」「不十分だが正直に答えた」が多く，母親の方がまじめに子供と向き合う姿勢がうかがえた．エイズについての会話の希望は父親が「男の子」に対して母親は「男の子」「女の子」に対してあり，これは家庭での教育者として位置づけられる．前回にも増して，今回の回答者は幼児や小学生からの早期教育が大切であると考えている．したがって，エイズについての早期教育の意見を今後，とりいれていく必要があると考えられる．

7．「エイズは他人事ではない」という親への教育ポイント

「エイズ会話の希望」がある父親，母親とも「この1ヶ月間にエイズ会話」をしており，希望をそのまま実践していた．「この1ヶ月間に会話」をした父親，母親とも「他人事ではない」と考えており，行動をおこすには「エイズは他人事ではない」と感じるのが教育の大切なポイントであろう．「調査報告プリント」を見た父親は「エイズは他人事ではない」と思っている傾向があった．それは「エイズは

他人事ではない」といった脅しではなく，「エイズは誰にでもかかる病気である．」と認識できる教育をする必要があると示唆された．

V．おわりに

今回の調査はある１つの中学校の親を対象にし，エイズに対する意識のアンケートを取り，その結果を親に返した後に又，同一のアンケートをとって前後の比較をする事により両親へのアプローチ方法をさぐることにあった．回収率の差がかなり異なったこと，また介入研究のようなコントール群を設定できなかったために前回との比較はできなかった．しかし断面調査として，子どもに対する親の教育の実態と意識についての一面を引き出すことが出来たのではないかと考えられる．

結果は次のとおりである．

① 今回の調査前に行った講演会の出席率は低く，それによる効果は評価できなかった．

② 「この１ヶ月間のエイズについての会話」や「エイズは他人事ではない」など前回より望ましい方向にシフトしていた．

③ 少なくとも回答者の36％の父親が調査報告プリントを見た．しかも両親共に見たのは206世帯中，63世帯(31％)であった．

④ 「調査報告プリント」を見た父親ほど「エイズは他人事ではない」と考えていた．

⑤ 前回より両親は子どもが幼児や小学生から，性・エイズについての早期教育が望ましいと考えていた．

以上から家庭における父親へのアプローチとしては，母親との会話を促す内容や身近な内容が盛り込まれたプリントをとおした啓発教育の活用が効果的かと思われる．

最後に，本研究をすすめるにあたり，ご協力くださいました横浜市立豊田中学校の校長先生はじめ諸先生，保護者の皆様に厚くお礼を申しあげます．

VI．文　　献

1）東京都生活文化局女性青少年部青少年課：東京都青年の関心領域と意識・行動に関する調査．P6．1997．
2）吉宮仁美，尾崎米厚，母里啓子：中学生と親のエイズ会話の現状．日本公衆衛生雑誌．45(5)，P449-P456．1998．